清水多吉先生のご退職を惜しむ

手川　誠士郎

清水多吉先生の誕生日は昭和八年八月八日である。

先生は、二十世紀のあり方を運命付けていく第二次世界大戦前夜に生を受け、第二次大戦後の時代を作りゆく流れの中へと身を投じ、常に時代を見通そうとする精神的営為のもとで二十世紀を走り続けてきたといってよいであろう。

この八月に古希の芳寿を迎えられ、本学の定年規定に従って平成十五年度をもってご退職ということになるのであるが、先生の在職期間は、非常勤講師として教壇に立って以来、四十一年の永きにわたっている。

しかし清水先生ぐらい、古希であるとか、定年であるとかという言葉のそぐわない人はいないであろう。なぜなら先生には、老いによる精神の形骸化が見られないからである。それは、内的に、真の意味での能動的なニヒリストとしての生き方と、会津人としての誇りを常に貫くということから発するものではないかと拝察する。

事の分かれ目に立って、判断を下さざるを得なくなったとき、「私は会津の生まれです。」という言葉に始まって、戊辰戦争に遡っての会津人の心構えをいくど聞かされてきたことだろうか。

しかし、その言葉を先生が発する時はたいてい、心中で、現代を生きる人間として、他者と自己とが、または、全体と個人とが共に生きうる道をこの一瞬においていかに判断すべきか、心中でさまざまな可能性を検討し、模索され

ている時なのである。

本学ご在職の四十余年の時の流れは、日本の社会にとっても、立正大学にとっても目的の見えない、しかし常にそのあり方に変革を求められる激変の時であったといいうる。

清水先生は、先駆けてフランクフルト学派の社会理論のもつ意味の重要性に着目し、ジャーナリスティックにそれを世に問う役割を果たしてきた。そして、その理論が、行く先の見えない社会と大学の変化に果たす役割を実践的に求めて、七十年代という日本のみならず世界の激変の時代において常にアクティブにその行く方を指し示すべく、フランクフルト学派の社会理論を読み解き、若者を啓蒙していったのである。七十年代、日本社会のひとつの時代の方向を形作る役割の一端を担っていたことは間違いがないといいうる。

先生の社会的な活動は、多岐にわたるが、もっともユニークなのは、七十年代の新たな社会秩序を求める若者への啓蒙的活動である。寺子屋と呼ばれた私塾には大学の講義に不満を感じた多くの若者が集い、ここを通して他大学の多くの若者が先生の下に集まったのである。そして能力あるものへの面倒見のよさもまた会津人の律儀さであったのであろう。

もちろん学術的活動においても多岐にわたる活動をされている。日本哲学会の編集委員、日本哲学会学会事務局の運営、そして社会思想学会の会長職などを精力的に務め、本学での大会・総会開催など、立正大学の哲学科の存在を世に知らしめている。

また、哲学科にとって、永年の課題であった大学院博士後期課程、夜間主コースの設置も先生のご努力で実現されている。

著作活動もまた、後の著作一覧にあるごとく、哲学の分野に限らず、歯切れのよいエネルギッシュな文体で、速筆

かつ多作である。

しかしなんと言っても先生の面目は講義にある。すっきりした切り口の論を、断言判断で一気にしゃべり通す、勢いのある講義は、七十年代、某評論誌の名物教授の名物講義として誌上に名を連ねる常連であった。

いつでも、研究室の開け放たれたドアーに向かって、指にタバコをはさみ肘をテーブルに突いた姿で座り、タバコから立ち昇る煙で白髪のめっきり増えた前髪が黄色くなっている、あの見慣れた先生の姿が研究室から消えてしまうのかと思うと、先生にお会いして以来三十余年の喜怒哀楽が一瞬のうちに蘇り、言葉に尽くせない寂しさを感じる。我の強い、それでいて情のある名物教授がつぎつぎと消えて数少なくなっていくのも、ひとつの時代なのであろうか。

清水多吉先生のご退職を心から惜しみつつ、なお二十一世紀を見通しうる思想的営みを先生にご期待申し上げて、筆をおくこととする。

［主要研究業績目録］

Ⅰ　著　書

《単独執筆》

一九七四年　『戦争論入門』　日本文芸社

一九七七年　『一九三〇年代の光と影』　河出書房新社

一九八〇年　『ヴァーグナー家の人々――三〇年代バイロイトとナチズム』　中央公論社

一九八四年　『ベンヤミンの憂鬱』　筑摩書房

一九八六年　『一九三〇年の光と影　増補版』　河出書房新社［再刊・増補版］

一九九九年　『ヴァーグナー家の人々――三〇年代バイロイトとナチズム』［再刊］　中央公論社・中公文庫

《共同執筆》

一九六五年	『社会と倫理』第二巻	日本評論社
一九六六年	『社会と倫理』第五巻	日本評論社
一九六八年	『社会と倫理辞典』別巻	日本評論社
一九六九年	『拒絶の精神』	大光社
	『討論七〇年をどうする』	田園書房
一九七〇年	『ローザ・ルクセンブルク論集』	情況出版
一九七一年	『反体制の思想』	自由国民社
	『婚姻の原理』	現代思潮社
一九七二年	『われわれにとって父とはなにか』	社会思想社
	『革命思想の名著』	学陽書房
一九七三年	『性思想の名著』	学陽書房
	『社会学思想』	学文社
	『日本ユートピア学事始』	河出書房新社
一九七四年	『哲学の歴史と諸問題』	東銀座印刷出版
一九七五年	『現代を動かす人と思想』	ぎょうせい
一九七八年	『フロイト精神分析物語』	有斐閣
	『現代思想別冊——現代思想の一〇九人』	青土社
一九七九年	『現代思想一二月号——二七人の今日の思想家』	青土社
一九八〇年	『詳解現代論争辞典』	流動出版
一九八三年	『哲学と宗教——菅谷正貴先生古希記念論集』	理想社
一九八六年	『中国思想研究論集』	雄山閣出版
一九九〇年	『現代思想への道程——江川義忠先生古希記念論集』	北樹出版

II　論文・論説

《単独執筆》

一九六三年　「〝人間疎外〟についての若干のノート」　『立正大学文学部論叢』第十七号
一九六五年　「修正主義の歴史的源流」　『立正大学哲学会紀要』第一号
「修正主義の歴史的源流」　季刊『社会科学』第七号　経済往来社
「現代戦争論――クラゼヴィッツの包囲殲滅論を通して」　『思想の科学』八月号　思想の科学社
一九六六年　「高校〝倫理・社会〟の調査報告」　『教育』六月号　国土社
一九六七年　「悲劇論ノート――初期ルカーチの小論文を手がかりとして」　『立正大学文学部論叢』第二九号
一九六八年　「国家と戦争――戦争はコミュニケーションの一手段である」　季刊『社会科学』第一三号　経済往来社
「マルクーゼの思想とドイツ新左翼」　『情況』創刊号〔七月〕　情況出版
「西独ＳＤＳの軌跡と背景」　『世界』八月号　岩波書店
「ドイツ急進主義派の宣言――ＳＤＳは訴える」　『情況』九月号　情況出版
「批判大学論（最終回）」　『情況』一一月号　情況出版
一九六九年　「スパルタクス団六八の分裂――ＳＤＡＪとチェコ」　『情況』合併号〔一月〕　情況出版
「永遠革命としての学園闘争」　『現代の眼』一月号　現代評論社
「大学占拠と文化」　『情況』三月号　情況出版
「管理社会とマルクーゼ――抑圧の秩序かエロスの実現か」　季刊『社会科学』第十五号　経済往来社
「イデオロギーとしてのファシズム」　『情況』九・一〇月合併号　情況出版
「全共闘の使命は終わったか」　『現代の眼』一二月号　現代評論社
「悲劇論ノート」　『哲学』日本哲学会編集第二八回大会研究要約集
一九七〇年　「自然の反乱――思想史的スケッチ」　『立正大学文学部論叢』第三七号
「戒厳令下のカイロにて」　『潮』一〇月号　別冊　潮出版
「三〇年代の時代相とホルクハイマーの位置」　『立正大学人文科学研究所年報』第八号

「われらのうちなるファシズム」　『情況』一二月号　情況出版
「〝批判理論〟成立の背景」　『理想』一二月号　理想社

一九七一年

「ルガーノ紀行――ホルクハイマー会見記」　『中央公論』四月号　中央公論社
「マルクス主義家族論の陥穽」　『情況』五月増刊号　情況出版
「〝批判理論〟の展開」　季刊『社会思想』一――一　社会思想社
「深更の〝父親殺し〟」　『現代の眼』六月号　現代評論社
「先取りとしてのファシズム革命――『野獣たちのバラード』は何を見落としたか」　『映画批評』八月号　映画批評社
「ネオ・ファシズム論の系譜」　『現代の眼』一一月号　現代評論社
「W・ライヒの思想と足跡（第三回研究発表会発表要旨）」　『立正大学哲学・心理学紀要』第三号

一九七二年

「悟性的秩序の崩壊とその予兆」　『情況』一月号　情況出版
「《私》にとっての反撃の原基とは」　『情況』三月号　情況出版
「クーデターの技術」　『出版ニュース』三月中旬号　出版ニュース社
「クラウゼヴィッツの政治とイロニー」　『情況』八月号　情況出版
「シュミットの〝自然〟概念をめぐって」　『立正大学文学部論叢』第四四号
「ハイデッガーとマルクーゼ」　『立正大学文学部論叢』第四五号

一九七三年

「聖ラディカリストの肖像――シンポジウム『オルガニズムの神秘』をめぐって」　『映画批評』一月号　映画批評社
「ハイデッガーとマルクーゼ」　『現代思想』二月号　青土社
「対立と抗争の政治哲学〈カール・シュミット断章〉」　『情況』六月号　情況出版
「ある焦燥感と自壊――四〇年代初頭ホルクハイマーの場合」　『現代思想』九月号　青土社
「国学者と言語」　『寺子屋通信』第五号　寺子屋教室
「わが内なるファシズム――三〇年代ファシスト・イデオローグの挑戦とある種の回答」　『学術団論集』No.3　同志社大学学術団論集編集委員会
「三〇年代ハイデッガーの諸問題」　『立正大学哲学・心理学紀要』第四号

一九七四年

「言語と主体――平田篤胤とその門人たち」『現代の眼』一月号　現代評論社
「社会的ユートピアと自然法」『現代思想』一月号　青土社
「マンハイムとホルクハイマー」『立正大学文学部論叢』第四八号
「三〇年代からみたルカーチ・コルシュ（同時代精神の行く末）」『情況』六月号　情況出版
「フランクフルト学派の諸問題」『立正大学文学部論叢』第五〇号
「ハイデッガーとブロッホ」『現代思想』一一月号　青土社

一九七五年

「滝田修と全共闘運動」『現代の眼』一月号　現代評論社
「戦前マルクス主義とアジア的生産様式」『伝統と現代』三月号　伝統と現代社
「ハイデッガーによせて」『寺子屋雑誌』第一号　寺子屋教室
「ある通底穴」『現代思想』五月号　青土社
「ヴァイマール期の反近代思考」『現代思想』八月号　青土社
「ナチス論・考」『情況』八月号　情況出版
「寺子屋教室繁盛記――マルクスに人気なく、国学・水戸学大盛況は何故か」『中央公論』八月号　中央公論社
「ヴァイマール精神史断章――特にA・ローゼンベルクの〝二〇世紀神話〟をめぐって」『立正大学文学部論叢』第五三号
「近代主義批判のリアリティー」『現代の眼』一月号　現代評論社

一九七六年

「法に〝なじむ〟〝なじまない〟ということ」『情況』一月号　情況出版
「日本人の美意識」『公評』三月号　公評社
「大戦後世界の思想的課題と主体性」『流動』四月号　流動出版
「西田幾多郎と青年の自己納得」『歴史公論』五月号　雄山閣
「わがゼミナール」『流動』六月号　流動出版
「ウル・キント論――受難と復讐の原像」『情況』七月号　情況出版
「現代著作名鑑」『流動』八月号　流動出版
「〝権威〟と〝技術合理性〟と」『現代思想』一〇月号　青土社

一九七七年

「異教徒的〝死〟とナチズム――ナチズムと死の哲学」『伝統と現代』一一月号　伝統と現代社
「奥羽越列藩同盟と東武皇帝」『歴史公論』一月号　雄山閣
「フランクフルト学派研究雑感」『寺子屋雑誌』第五号　寺子屋教室
「近代ヒューマニズムの陥穽」『現代の眼』七月号　現代評論社
「フランクフルト学派と日本思想史」『寺子屋雑誌』第八号　寺子屋教室
「近代日本の天皇観――平田篤胤から」『歴史公論』八月号　雄山閣
「エルンスト・ブロッホの死」『現代思想』九月号　青土社
「〝運命愛〟と〝醜悪な死〟の美学」『理想』一〇月号　理想社
「飛翔と不安――福本和夫と三木清をめぐって」『流動』一一月号　現代評論社
「ホルクハイマーとアドルノ」『現代思想』一一月号　青土社

一九七八年

「西独〝青年ドイツ・フィルム〟と三〇年代――一九三〇年代への問い――」『展望』三月号　筑摩書房
「文化批判としての芸術論――アドルノのワグナー論をめぐって――」『実存主義』四月号　以文社
「学問における差異性と同一性」『寺子屋雑誌』第六号　寺子屋教室
「マルクス主義の逆説」『現代思想』五月号　青土社
「城址妄想――〝東武天皇〟と維新戦乱」『現代の眼』七月号　現代評論社
「ハイデッガーとフランクフルト学派」『理想』七月号　理想社
「西独ネオ・マルクス主義とその周辺」『理想』九月号　理想社
「戦後日本を震撼させた重要著作（海外編）」『流動』一〇月号　現代評論社
「フランクフルト学派と管理社会論」『思想の科学』一〇月号　思想の科学社

一九七九年

「〝同一性〟論とフランクフルト学派」『立正大学文学部論叢』第六二号
「報告：ファシズムと社会革命」『第三文明』一二月号　第三文明社
「現代の確実さと不確実さ」『現代の眼』一月号　現代評論社
「日本近代思想と論争の系譜」『流動』一月号　流動出版

「日本のアジア的生産様式論者」　『歴史公論』四月号　雄山閣
「理論的営為への視座」　『寺子屋雑誌』第八号　寺子屋教室
「ワグナー家の人々［1］」　『第三文明』五月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［2］」　『第三文明』六月号　第三文明社
「弁証法理論の展開」　『流動』六月号　流動出版
「〝近代化〟論とマルクス主義」　『流動』六月号　流動出版
「ワグナー家の人々［3］」　『第三文明』七月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［4］」　『第三文明』八月号　第三文明社

一九八〇年

「アメリカ報告・非同心円社会とフランクフルト学派」　『流動』一月号　流動出版
「ワグナー紀行」　『第三文明』一月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［5］」　『第三文明』二月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［6］」　『第三文明』三月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［7］」　『第三文明』四月号　第三文明社
「アメリカ・その巨大なる非同心円の国で」　『寺子屋雑誌』第一〇号　寺子屋教室
「ワグナー家の人々［8］」　『第三文明』五月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［9］」　『第三文明』七月号　第三文明社
「ワグナー家の人々［10］」　『第三文明』八月号　第三文明社
「コウキセイジューハ、ワガコトニアラズ」　『流動』八月号　流動出版
「〝歌〟と〝思い〟と」　『寺子屋雑誌』第一一号　寺子屋教室

一九八一年

「管理社会論の成立過程」　『経済評論』一月号　日本評論社
「司馬江漢と〝近代〟」　『歴史読本』一月号　新人物往来社
「ベンヤミンにおける〝象徴〟と〝寓意〟」　『現代思想』二月号　青土社
「証言　われわれのなかのヒットラー」　『中央公論』二月号　中央公論社

「ベンヤミンと現代」　『思想』一〇月号　岩波書店
一九八二年　「ハーバーマスの〝近代化〟をめぐって」　『思想』六月号　岩波書店
一九八三年　「ベンヤミンの〝憂鬱〟」　『立正大学人文科学研究所年報』第4号　別冊
「ヴァーグナー変貌」　『ユリイカ』八月号　青土社
一九八四年　「ポスト言語学ポスト記号論――社会思想の中で探る」　『理想』一月号　理想社
「ベンヤミンにおける〝遊び〟と〝玩具〟」　『ユリイカ』三月号　青土社
「バベルの塔」　『理想』九月号　理想社
「メランコリカーの世界了解――カフカとベンヤミン」　『ユリイカ』一一月号　青土社
一九八五年　「ヘレニズム状況下の社会思想」　『理想』一月号　理想社
「〝乱〟もまた教育の常態」　『理想』五月号　理想社
「現代の聖杯騎士ハイデッガー」　『理想』七月号　理想社
「ワーグナーは病か――ワーグナーと祝祭」　日本ワーグナー協会編『年鑑ワーグナー・一九八五』音楽之友社
「認知科学者たちは狂気の集団か？」　『理想』九月号　理想社
一九八六年　「日本の右翼思想と天皇制」　『法学セミナー増刊　総合特集シリーズ』第三三号　日本評論社
「パリ、ベルリン、東京の〝パッサージュ〟――憂鬱者の時代把握」　『月刊社会党』二月号
「〝生活世界〟論ノート」　『立正大学人文科学研究所年報』二四号
一九八七年　「ドイツ関係学会の新しい波」　『立正大学文学部論叢』第八六号
「テクノ・ニヒリズム下の現代思想――情緒的思想の流行とコンピューター」　『正論』第一七六号　サンケイ新聞社
一九八八年　「シュトラウスは有罪か？――表面上のマイスター・シュトラウス」　『音楽芸術』四月号　音楽之友社
一九八九年　「ドイツ的ポスト・モダン論に抗して――ニコラス・ルーマン教授批判」　『立正大学人文科学研究所年報』第二七号
一九九〇年　「第二期『情況』創刊をめぐって――「新しい天使」によせる」　『出版ニュース』第一五三二号　出版ニュース社
「戦後思想史のなかのハイデッガー」　『思想』七月号　理想社
一九九一年　「中世都市ルーヴァン紀行」　『中央公論』二月号　中央公論社

一九九二年	「幻視の都市、幻視の空間」	『現代思想』一二月号	青土社
一九九四年	「ベンヤミンの三つの相貌」	『思想』六月号	岩波書店
一九九八年	「問題提起（〔社会思想史学会〕第二二回大会記録）」	『社会思想史研究』第二二号	北樹出版
	「第一次大戦と外傷性神経症」	『情況』三月号	情況出版
一九九九年	「『啓蒙の弁証法』と『近代の超克』」	『情況』五月号	情況出版
	「ハーバーマスの〝公共性〟概念とその問題点」	『聖学院大学総合研究所紀要』第十六号	
	「ハーバーマスとともに」	『情況』二月号	情況出版
	「フランクフルト学派とわが『情況』」	『情況』一一月号	情況出版
二〇〇〇年	「〝相互承認〟〝文化的多元主義〟〝再配分〟」	『立正大学人文科学研究所年報』第三八号	

Ⅲ 翻訳

《単独翻訳》

一九六六年	C・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』上・下巻	現代思潮社
一九六八年	H・マルクーゼ『ユートピアの終焉』	合同出版
一九七〇年	M・ホルクハイマー『道具的理性批判Ⅱ』	イザラ書房
一九七五年	M・ホルクハイマー『権威主義的国家』	紀伊国屋書店
二〇〇一年	C・フォン・クラウゼヴィッツ『戦争論』上・下巻［再刊］	中央公論新社

《共同翻訳》

一九六九年	H・マルクーゼ『生と死の衝動』	合同出版
一九七六年	E・フッサール、M・ハイデッガー、M・ホルクハイマー『三〇年代の危機と哲学』	イザラ書房
一九九一年	J・ハーバーマス『社会科学の論理によせて』	国文社
一九九五年	J・ハーバーマス他『過ぎ去ろうとしない過去――ナチズムとドイツ歴史家論争』	人文書院
一九九九年	E・フッサール、M・ハイデッガー、M・ホルクハイマー『三〇年代の危機と哲学』［再編集・再刊］	

二〇〇〇年　J・ハーバーマス『史的唯物論の再構成』

平凡社・平凡社ライブラリー
法政大学出版局